

おおくに 大國について

さきにも言ったように、角折と尾波は、大國村の枝郷から、大屋村に編入されたものである。かつての大國村の大部分は、仁摩町の大字として、今なお息づいている。

十世紀前半に編纂された、我が国最古の地名辞典でもある「倭名類聚抄(わみょうるいじゆしょう)」に、邇摩郡(にまごおり)七郷の内に「大國」とある(昭和56年臨川書店版)のが、初見という。八重葎(やえむすい)

大屋一大森間の古道

⑦ 行く還往を続

三井淳

は、その名起たまのみこと(神社とこりに言及している。「大國主神社のごとである(写真)。この神社は、國字の力リスマ野々口隆正(ののぐちたかまさ。一七九二〜一八七二)が、この宮山の「みこもりいわ」で、強烈な啓示を享(う)けたことでも知られる。)

「神代のむかし大國主の神出雲よりこまにわたりに給ひ、さきまたまをわけて、それより西北のくにぐにをあまりねくひらきたまへるに、より、大國主といふ名をおひたまへるなり。(中略)それより出雲にかへりたまへるとき、そのいつも、いはみの出さきなれば、邇摩か

らしまのあたりにつきたまひけむ。むかしいそたけ村は五十猛神かへり給ひて、しはしおはしける所といへは、大國主もまたからくによりかへりつきたまひて、この村にしはしるたまひけむ」(藤井宗雄「石見国神社記」巻二邇摩郡、山崎亮翻刻本より引用)。

隆正は、地祇(くにつかみ)の大元締めである大國主命は、この大國の地に一時住まわれたものだと確信するに至り、以後大國姓を名乗る。(五十猛歴史研究会 会員 みつい・あつし)



八千矛山大國主神社

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おすく」
◇木曜日は内藤博之さんの「ガウデ